

自主的な市民活動としての「子育てサークル」

当事者活動による社会変容の可能性に向けて(1)

大 東 貢 生
長 光 太 志
井 上 未 来

【抄 録】

この小論の目的は、近年重要と考えられているボランティア活動やNPO・NGO活動などの自主的な市民活動の可能性を探るために、「子育てサークル」Aを事例として検討することにある。Aの設立者と参加者に自由記述およびインタビュー調査を行った結果、活動内容(理念)、運営手段(場所の確保・毎回の参加・掲示板・勧誘・連絡係)双方とも、設立者の役割は大きいと考えられる。しかし、参加者はサークルの活動内容(理念)に共感しており、運営についても消極的な姿勢だけではないところが見受けられる。

キーワード 市民活動, 当事者活動, 子育てサークル

1. 問題の所在

この小論の目的は、近年重要と考えられているボランティア活動やNPO・NGO活動などの自主的な市民活動の可能性を探るために、自主的な市民活動のひとつである「子育てサークル」を事例として検討することにある。1995年の阪神・淡路大震災を1つの契機として、ボランティア活動などの自主的な市民活動が活発になってきた。こうした自主的な市民活動は、これからの社会において重要な役割を担うと考えられており、この自主的な活動を行政的な側面から支援するため1998年にNPO法が制定され、また、行政や学校団体によるボランティアセンターの設立が行われている。

それに伴い自主的な市民活動に対する研究も進められるようになった。例えば、ボランティア研究を行っている入江幸男(1999)は、ボランティア活動には「社会参加」「社会変革」「公共性の主体」としての役割があるという。また、障害者運動や女性運動を行ってきた中西庄司と上野千鶴子(2003)は新しい現実をつくりだすニーズを持つ当事者による「当事者主権」が、「最大多数の最大幸福」を基準とする「公共性」から、多様性を容認し違っていてもいい権利を擁護する「公共性」を生み出すことができるという。

ここでは、「公共性の主体」や「当事者主権」が、実際の自主的な市民活動においてどのように展開されるのかについて、自主的な市民活動のひとつとして「子育てサークル」を取り

上げ、母親たちの意識について検討を行いたい。「子育てサークル」は、今日の少子高齢化社会の中で重要であると考えられている。それは、2003年に成立した次世代育成支援対策推進法や2004年に成立した少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的計画について(子ども・子育て応援プラン)などに現れている。しかしながら、従来の「子育てサークル」の研究は「子育て」という側面のみが取り上げられ、自主的な「サークル」としての研究はあまりされてこなかった。したがって「子育てサークル」を通じ、母親たちの意識の変化や、その変化による自主的な活動の継続性について検討することには意味があるように思われる⁽¹⁾。

2. 調査の概要

2004年11月から2005年4月に、京都市内で活動する「子育てサークル」Aを対象に自由記述とインタビューによる調査を行った。なお、「子育てサークル」Aは、行政機関から週に一度朝から夕方まで部屋を借り、来たい時間に来て帰りたい時間に帰る形態で運営されている。積極的に運営を行う設立者Bさんがサークルを支えている。以下では、「子育てサークル」Aの設立者と参加者に対する調査から、「子育てサークル」Aに関わる母親たちの意識の変化と自主的な活動の継続性について検討したい。

3. 「子育てサークル」A 設立者のインタビュー調査から

この章では、「子育てサークル」Aの設立者であるBさんのインタビューから、「子育てサークル」Aの概要をまとめたい。

3.1 活動内容

「子育てサークル」Aの設立者であるBさんは京都市出身ではなく、親の転勤により転居を何度か行っている。京都市には、幼稚園・小中学校・大学以降に住んでおり、延べ15～6年居住している。2004年現在3歳と1歳の子どもがいる。現在の住居での近所づきあいはあまりないと語っている。

3.1.1 活動形態

「子育てサークル」Aは週に1回京都市の社会福祉協議会の一室を借り、10時から17時まで活動を行っている。Bさんは活動形態について次のように語る。

当初からね、やりたいことをしたい人が企画をして、「それだったらやりたい、こんなふうになりたい」とかいうふうに、みんなで話し合ってきたつもりなんです、私は。一参加者としてだったらどう思っているかわからへんし、でもその時のメンバーは多分「あ、こんなこと面白いし、こんなん教えて」、っていう感じで進んできたと思うんですね。

家にいて、「ああ、今日木曜日やしAの日やなあ、うーん、3時過ぎちゃったなあ、ああでもまだ(子どもは)昼寝してるしなあ、どうしようかなあ5時までみんないるかなあ、うーん、

4時くらいからがんばって、あ、ちょっとでも顔見に行こうかな、よしがんばって行こう、あー、来たよー、でももう5時だよー、うん今日はがんばって来ただけで良いんだ」もうそれで自分で誉めとくねんていう人たちが来る。そういう人たちからOK、っていうサークルでしょうか。

親それぞれの興味関心や考え方をお互い尊重し合う。やっぱり育児観っていうのはそれぞれ違って当たり前っていうか。それでも「その中で折り合いをつけていこう」というのがまあ大事かなと思って。で、それぞれのお互いの生活があるから、そんな無理もできないし、単身赴任の人もいれば、おばあちゃんおじいちゃんと一緒に住んでいはる人もいれば、いろいろあるので、まあ「活動したいことを出し合って、できる人ができる時にできることをできるようにしよう」と。

「子育てサークル」Aについて、Bさん自身は「できる人ができる時にできることをできるようにしよう」ということを特徴と考えている。それは、お互いの価値観や生活の方法の多様性を認め合うところに由来するようである。実際に行っている活動は、料理を作る、遠足、花見などである。栄養士や保健士の話を聞くこともあるが、それらも、やりたい人がやりたいことを行うこと、参加したい人が参加することで運営されている。その際にかかる費用もその場で清算するようにしている。

3.1.2 活動に対する思い

こうした「子育てサークル」Aの活動形態は、どのようにして始まったのであろうか。Bさんは活動に対する思いを自身の子育ての状況から次のように語る。

子どもが産まれて一ヶ月くらいは外にも出られずに、家でうんこ替えて、おっぱいあげて、ねんねさしてっていうその毎日で、もうそれがしんどくなってきてしまっ。「まあ外に出てみましょう」と私はすぐ思ったんですね。

初めての子どもっていうこともあって、「子どものつながり」っていうのが欲しかったっていうのもあったし、主人が帰ってくるのが遅かったんですね。夜の12時とか1時とかだったんで。子どもと二人で家において、かかってくる電話は「教材いりませんか」という電話だったりで、煮詰まってくるわけです。で、「同じ境遇の人に会いたかった」というのが、まあそういう感じですね。でも、スーパーとか行ってもあんまり誰にも会わないし、子どもを連れてはる人、公園に行っても、2月3月って寒いし、誰もいないんですよ。「自分が会いたいな」という時に人はいないし、「ああ、これはなんか寂しいなあ」というのが思うところで。

Bさんによれば、同じような状況にある人と出会い、子どものつながりや親どうしのつながりを求めてサークル活動を始めたようである。Bさんはきっかけについて次のように語る。

子どもが3ヶ月の時に近くのスーパ-に写真を出しに行った時に、たまたま同じくらいの月齢の赤ちゃんを抱っこしてはって、嬉しそうに写真をもらってきて(いた人がいた)。「あ、きっとこれは前日に初節句をやった人だ」と思って、「きっと同じくらいだろう」と思ったんで、声をかけて、その場で電話番号と名前(を聞いた)、それで住所を聞いたらものすごく近いし、「これはなんかの縁だ」と思って、「サークルをしようと思ってるねん」ということを彼女に言ったわ

けです。で、「じゃあいいよ、やるやる」とかいう感じで、「それにはメンバーを募りましょう」ということで、チラシをつくり「集めましょう」と思ったわけです。

その月の最初にその彼女と会って、その月の末くらいに「保育所の4ヶ月検診が終わったら保健所の交流会というのに出られるらしい」というのを彼女から聞いたんですね。その交流会の時に、その時には2ヶ月毎に赤ちゃんを集めて話をしたりっていう催しだったので、そこで声をかけて、「こんなことをやってるんやけど、やりたいと思ってるんやけど、なんかやりたいことある？」とかいうことで話を聞きました。「(集まって)何したい」ってその時に集まったメンバーに聞いたところ、「いや、とりあえず喋りたい」っていうことになって、「じゃあまあ喋りましょうか」ということで集まったんです。で、次の月にもまた、保健所の交流会でこのチラシを配って、「こんなことを立ち上げてみようと思ってるんですけども、何をしたらいいかちょっと皆で考えて行きましょう」みたいなこと、あと「初めての赤ちゃんで困ってるんです」っていうことをみんなで喋ったら、「ちょっとは楽になれるかなーと思ってるんです」みたいなことをみんなに言ったら、「じゃあ行きます」っていうふうに賛同してくれはったんですね。はい、いろいろ。その時は5, 6人やったかなあ。

Bさんは、たまたま同月齢の子どもを持つ女性と出会い、サークル形成を働きかけた。その後同月齢の子どもが集まる保健所の交流会で作成したチラシを配布し希望者を募っている。こうした経緯を経てはじまった「子育てサークル」Aは、「とりあえず子育てについての話をしたい」というところから始まっている。「子育ての話を共有したい」という思いから、無理に企画や行事を行わず「話す」ことを中心に行うということとなり、「できる人ができることを」という活動形態につながっていると考えられる。

3. 1. 3 活動のメリット

「子育てサークル」Aは、Bさんの語りによれば、同じような状況にある人と出会い、子どもどうしのつながりや親どうしのつながりを求めるサークル活動である。サークルは、「とりあえず子育ての話がしたい」母親たちの集まりの場であり、こうした母親たちの負担にならないように「できる人ができる時にできることをできるようにしよう」ということが特徴になっていると考えられる。では、こうした非常に緩やかなサークル活動の形態はどのようなメリットを生み出しているのだろうか。

その場に行くとな、子どもたちにとっては何が良かったかというと、他のお母さんにも自分の子どもが関わってもらえるから、それもあるでしょう。それから他の子どもたちとも関われるから、やっぱり経験値(知)がアップしますよね。経験の幅が広がるっていうか。

母親としては他のお母さんのかかわりの仕方っていうのを自ら気付く機会になると思うんですよ。「喧嘩しててどうやって止めたら良い」とか「どのへんで手を出す」とか「靴履く」とか。帰り際にものすごくぐずったりするんですね、うちの子は特に。そういう時に他のお母さん「もう、ほら、靴下履きや、そんなん言わんと」とか、こうやんわり言ってくれと、イライラしている気持ちが落ち着く。これはかなり、私は助かっていることですな。

あと、お母さんの年代がこう20代から40歳くらいまで幅広いから、いろいろ知ってはるか

らね。若いお母さんは、体当たりで遊べる、体を思い切り使って。「ああ、すごいなあ」みたいな。そういうことで参考になる部分もあるし、子どももそういうお母さんと遊んでもらって、すごいびのびできるんですね。また、年配のお母さんとかだったら、やっぱり考えてはる事がね、しっかりしてはるんですね。先のことをすごい考えてはるし、「先になれば、こういうこともあるし、こういうこともあるし」ということをアドバイスしてもらえ。それがなんて言うんでしょう、こう大上段に構えて「こうだからこうしなさい」みたいな行政の指導じゃなくて、同じ立場でお互いに言い合える環境というのはすごいいいんじゃないかな。

孤立しがちな「子育て」に対して、年齢や生活習慣の違う多様な母親と触れ合うことによって、子育て経験が共有化されることがある。子どもにとって友人を作るということが目的であったとしても、母親たちのこうした知識や経験、さらには問題の共有化は自主的な市民活動において重要なことと言えるであろう。Bさんが、「最初、自分の悩みばかりばーっと言ってた方が、もう企画する側に回ったりとか。「へえ、こんなところがあったんだー」とかそういう発見は毎日あります」と語るように、知識や経験、問題点の共有化は参加する母親の変化や積極性につながっていると考えられる。

3.1.4 まとめ

この節では、「子育てサークル」Aの設立者であるBさんのインタビューから、「子育てサークル」Aの活動内容についてまとめた。Bさん自身は「できる人ができる時にできることをできるようにしよう」ということを特徴と考えている。Bさんによれば、同じような状況にある人と出会い、子どもどうしのつながりや親どうしのつながりを求めてサークル活動を始めたようである。「子育てサークル」Aは、「とりあえず子育ての話がしたい」母親たちの集まりの場であり、こうした母親たちの負担にならないように「できる人ができる時にできることをできるようにしよう」ということが特徴になっていると考えられる。さらには、孤立しがちな「子育て」に対して、年齢や生活習慣の違う多様な母親と触れ合うことによって、子育ての知識や経験、さらには問題が共有化され、参加する母親の変化や積極性につながっていると考えられる。

3.2 サークルの運営について

活動内容による参加者である母親の変化や積極性の獲得とは別な次元で、サークル活動を維持していくためには、日常的な運営が欠かせないと思われる。この日常的な運営について、Bさんの語りよりまとめたい。

3.2.1 活動場所の確保

Bさんによれば、当初の問題点のひとつに活動場所の確保があった。現在の活動場所は社会福祉協議会の一室であるが、この活動場所の確保について、Bさんは次のように語っている。

(集まる)場所もないし、「公園で集まりましょう、タダだし」。でも雨降ったら、「んー、雨降ったら止めね」という感じで、「公園で集まりましょう」ということで、最初の2ヶ月くらいは公園で集まったり。で、「行く行く」というメンバーさんは大体その(公園の)西側に多かったんで、「ここの公園だったら集まって喋れるよ」とか、「木が一杯あってとても和めるよ」

って情報交換をしたりしながら、西側の方の公園をいろいろ行ってたんですね。でもメンバーさんの中に東側にいはる、住んではる人とかがいって、「このままずっと西側の公園ばかりじゃ行きづらい」ということになって。また雨の心配もあるし「屋根のあるところが必要ですね」ということで。必要に迫られて「どっか場所を借りましょう」ということになったんです。

当初は、公園に集まっていたが、参加者が散らばっていたので集まりにくい人が出てきたこと、また雨の心配から、どこか屋根のある場所を借りることになった。

知り合いの保健士さんが「今貸してくれる可能性があるのは社会福祉協議会と児童館と保育所です」と3つの場所を挙げられて。真中で区役所にも近いから、「社会福祉協議会が借りられたいいなあ」ということで、社協にお願いに行ったんです。で、「そういう公共の場所を借りるためには規約とかが必要だろう」というふうになって、でまあ規約を作りかけたんですね。「一応こういうのもあるんですが」という感じで社協の方に「なんとか貸してくれませんか」というふうに頼んだんです。

でもちょっとそのへんもなかなか貸してくれづらいところもあって、そこで貸し渋りみたいな感じだったんですけども、参加者の知り合いの民生委員さんが、「こんな良いことやってはるのに」ということをどっからか言ってくれはって、で1週間に1回ずつ貸してもらえるようになったんです。

場所を借りるために行政への働きかけを行ったが「貸し渋り」にあったようである。その際に援助してくれたのが、民生委員さんである。場所の確保については、当初、Bさんが単独で行っていたのであるが、現在は順番に余裕のある人をお願いしているということである。

3.2.2 毎回参加すること

このようにして始まった「子育てサークル」Aであるが、当初Bさんは毎回参加していた。そのいきさつについてBさんは次のように語る。

最初の頃っていうのは、私はAに行くことが仕事というか、行くと誰がいるし、話も聞いてもらえるし。主人に、ばーっと喋らなくても、「子どもの、こんなところがかわいかったのよ」ということをみんなに喋って、「あーそうだったの、良かったね」と言ってもらって、「ああ嬉しい」という感じだったので、「(サークルを)休もう」という気がなかったんですね。

Bさんは活動の時には毎回参加するようにしている。それは仕事のようなものであったが、楽しかったので続いていると語っている。そのBさんも最近は休むようにもなったが、Bさんがいなくてもサークルは成立しているようである。

3.2.3 インターネットの掲示板の運営

「子育てサークル」Aの継続の特徴として、Bさんが行っているインターネットの掲示板の存在がある。掲示板は、発足当初の2ヵ月後にはすでに連絡用に出来上がっていた。この掲示板の経緯について、Bさんは次のように語る。

そのインターネットの掲示板に移行する前は、(サークルの)通信を月ごとにFAXしてたんですよ。「次、何日には何するよ」という、こういうやつをFAXしてたんです。今月の予定を書いて、で、メンバーさんに、がーっとFAXしてたんですね。でも、30人くらいにメンバーが膨れた時に、30分FAXの前で私はずっといてなあかんし。しかもね、このFAXがすぐFAX回線になってくれればいいのに、(電話になっていると)なんか(相手と)喋るでしょ。せやし「ごめん今FAXに(切り替えて)」といちいち喋らないけないから、通信送るだけで1時間くらい電話の前にいてないといけない。それはちょっと辛いから、「どうしてもインターネットが見れない人だけFAXで送ります」ということにして、それでインターネットの掲示板を借りたんです。

この掲示板の効果は大きく、参加者によれば、「会えなかった時には今日何したとかこう、見ることができる。これはすごく大きくて、それを見れば今日何したか誰が来たかわかるっていうことがあったので」というように参加できない参加者とのコミュニケーションの手段になっている。掲示板の運営においてもBさんの貢献は大きい。Aの参加者によれば、「最初は全然投稿がないわけです。真っ白。Bさんだけがどんどこと書いてって、誰かがちょっと勇気を出して「初めて投稿します」と書いていたら必ずこの幼稚園の先生のように返事が書いてあったり」と述べている。したがって、掲示板をコミュニケーションの手段として定着させたのもBさんの功績が大きいといえるであろう。

3.2.4 勧誘

「子育てサークル」Aは3歳児までを対象としており、卒会する(活動に参加できなくなる)親子が継続的にいる。したがって、新しい親子の勧誘が必要となる。この勧誘(スカウト)について、Bさんは次のように語る。

勧誘活動ですね。えーと、広報活動ですね。チラシをメンバーが持ってる人は持ってるかな。持っていない人は持っていない。公園で一人ではる人に直接言うかな。ていう感じですね。声をかけるんですね。これってやっぱり普通の世間一般の人から見たら、不思議な行為ですかね。なんか見も知らない人にこう声をかけるっていうのが普通にできちゃう人なんで。で、子どもどうし、(おもちゃを)貸し借りしながら遊んだりするから、別にそれが自然と。

二人目の子どもが保健所の交流会に行ってるんで、その時に「わーっ」と交流会のメンバーにこう投げかけて(チラシを配布して)。保健所の交流会は第4月曜にあるんですよ。でもほんとにこう「友達がほしい」というか、「喋りたい」と思うのは、その保健所の交流会が始まる4ヶ月より前の、この1ヶ月検診から、うん、4ヶ月までなんです。でもその間にはどこからも情報が入って来なくて。それが一番辛いところですね。

勧誘活動としては、保健所の交流会での勧誘、公園での直接の声かけがあるが、その他にチラシを子育て関係の行政機関に置くなどのことを行っている。このチラシ作成の費用も当初はBさんが出していたようである。

3.2.5 連絡係

このように「子育てサークル」Aの運営については、Bさんの役割は非常に大きいと言える

であろう。このことから B さんは今後のサークル運営について次のように語る。

運営スタッフっていうのはいないんですよ。そやけどまあ連絡をしてもらったりとか、えっと会計、ボランティアセンターの方から 1 万円 (の助成金) が下りるので、お金をどうやって使うかっていうのを、レシートばーっと集めてもらったりするのをしてもらったりとか、「そんなを、じゃあ、私するわ」ってこう自主的にしてもらえっていうのがとってもありがたくてね。でも、そういう人たちが、今卒会メンバーやし、さてどうかな。その連絡係も今、私が最初やってて、次 S さんという方がやって、その次 M さんという方がやって、その次また Y ちゃんママってこう順番にこう送ってはいるんですけど、まあその話を昨日サークルのメンバーさんに、たまたま偶然会ったんですけども、話したら、「今までこうずっと受身やから、連絡係、場所も取ったら良いだけって言われても、ずっしりきて、どうしたら良いのか、もう嫌っていうか、ものすごく「ああー」って思ってる」っていうのを聞いたから、「ああ、そうなの」っていう、このへんでこうギャップがありますよね。

B さんとしては、これまで自分が行ってきた会の運営に対する役割を参加者が自主的な形で行ってくれることがありがたいことであると考えているようであるが、サークルの参加者には運営を担う人がいないとも考えているようである。

3.2.6 まとめ

サークルの活動を維持していくための運営について、場所の確保、サークル活動への毎回参加、インターネットの掲示板の管理、保健所の交流会や公園での直接の声かけといった勧誘活動について、B さんの語りから見てきたが、「子育てサークル」A を維持する為に、B さんが果たしている役割は非常に大きいと言えるであろう。B さんは、このことについて「自分が楽しかったからやってきた」と述べているが、B さん自身の卒会のこともあり、B さんとしては、これまで自分が行ってきた会の運営に対する役割を参加者が自主的な形で行ってくれることがありがたいことであると考えている。しかし、B さん自身はサークルの参加者には運営を担う人がいないとも考えているようである。

4. 「子育てサークル」参加者のインタビュー調査から

それでは、前章での「子育てサークル」A の活動形態 (理念) や運営が、参加者にどう理解され共有され、行動に移されているのであろうか。以下では、「子育てサークル」A の参加者 11 名に対し、自由面接による聞き取りという方法でインタビューを行った。そのインタビューから、活動内容 (理念) と運営 (場所の確保・毎回の参加・掲示板・勧誘・連絡係) についての意見を聞いた。

4.1 活動内容

以下では、3.1.で展開した活動内容について、参加者の見解をまとめたい。

4.1.1 活動形態

「子育てサークル」Aの活動形態について、参加者は次のように回答している。

束縛がない。好きな時間に来て好きな時間に帰れる。時間帯が合わない人とはずっと知り合わない。

休むことに引け目がない。金銭的、時間的負担が少ない。

ざくばらんで強制的でない。時々パーティなどの企画もある。できる人がするところ。

できる人ができることをやれば良いところ、参加するだけでも良いところ、来られる時に来られるところ、連絡網などがないこと。

他サークルは時間厳守、イベント持ち回り等で行き辛くて辞めた。ここは好きな時間に来られるし、誰かができる時に言い出してイベントをするので気が張らない。もう少し企画があっても良いかも。

緩やかで長くいられる。全員が揃う時間がない。参加時間帯が違う人とは話せない。他のサークルは時間が決まっている。言い出した人次第で行事ができる。ずっと話しているので自然と友達になれる。

一番の情報源(受け取り、発信、発散)。家の用事、子どもの発達に合わせて参加できる。0歳から参加できる。家から近い。日常的な関わりができる。他サークルに参加したことがあるが、月1回、イベント持ち回り、新聞発行などが負担だった。出欠連絡がない。年代が違っても同じイベントに参加しにくい。話すことが中心なので、イベントをしたい人には物足りないかも。

公園などは寒い時や雨天時に使いにくいので、屋根の下なのが良い。輪があるので、誰かの紹介で入らないと、初めての人は入りにくい。

子ども同士で遊べること。公園など屋外は飛び出しなどが危険だが、室内だと親が監視しなくても子どもの世界を持って遊べる。親同士も話してストレス発散できる。

まとめると、参加者の多くが「自由度の高さ」を挙げている。他サークルとの比較の上でこの点が指摘されている回答もあり、大きな特徴となっていることが言える。屋内であることも挙げられており、施設面における重要なポイントとして考えることができるであろう。逆に、自由度が高いために参加時間の違う参加者同士の交流が少ないこと、初めての人が入りにくいこと、「できる人ができることをする」という方針から、イベント数が少ないことも挙げられている。この点は3.1.においてBさんが語っていたことと符合しているであろう。

4.1.2 活動に対する思い

「子育てサークル」Aの参加者は、サークル活動に対する思いについてどのように考えているのであろうか。以下には、参加するきっかけなどの質問から参加者の回答をまとめた。

子どもみらい館でのイベントで既に参加していた人から誘われた。3年前から。サークルに来ている人たちから色々な情報をもらいたかった。育児に関して他の人はどうしているか知りたかった。

福祉まつりで紹介された。子どもが8ヶ月の時から。ちょうど外に出たがる時期だったので。

保健所の交流会で発起人から誘われた。3年前から。友達がほしかった。他サークルが当時定員一杯だった。

友達に教えてもらった。3年前から。自分もだが、子どもの友達ができた方が良いと思った。

子どもとの顔見知りの人に声をかけられた。3年前から。情報、友達がほしかった。一人目の子ども

の時はサークル参加なし。

親子交流会の際、発起人から案内された。3年前から。話す相手、友達に飢えていた。子どもがいると寝かせられるところしか出かけられないから。同じ年代の子どもを持つ友達がいなかったため。些細なことを聞ける相手がほしかった。

既に参加していた人(公園で知り合った人)から誘われた。1年前から。誘われたら参加するが、一人では来ない。

友達(公園で知り合った人)に誘われた。知ってはいたが、これまで来る機会がなかった。初参加。室内で遊べる場所が良かったから。

参加のきっかけになっているのは、こどもみらい館(京都市子育て支援総合センター)でのイベント、保健所での親子交流会、福祉まつりなどの行政主催のイベントで紹介されたというものと、既に参加していた知人から誘われたというものに大別できる。また前者においては、そのイベントで行政から紹介されたというものと、そのイベントで会った既にサークルに参加していた人から紹介されたというものに、大きく分けることができる。そして、参加の動機としては、「情報の入手」、「親の友達作り」、「子どもの友達作り」の3点が大きな柱となっていると考えられる。

4.1.3 活動のメリット

「子育てサークル」Aへの参加の動機は、「情報の入手」、「親の友達作り」、「子どもの友達作り」であったが、実際にサークル活動を通して、参加者はどのようなメリットをサークル活動に見出しているのだろうか。メリットとデメリットについて参加者は次のように語る。

少し月齢が上の子どもを見て、自分の子と照らし合わせられること。

情報が得られる。個人では行きにくいところに行くきっかけになる。

親子共々友達が増えた。

自分と子どもの友達ができた(幼稚園に入るまで同年代の子と遊ぶ機会がない)。サークルに来ると子どもが触発されて元気になる。

外に出るきっかけになること、サークルに参加することで一日にメリハリがつくこと。

煮詰まってくる時に話して憂さを晴らせる。情報に助けられた。友達ができた。話す人ができた。サークルを長く休むと、自分も子どももストレスが溜まる。

寒くないこと。

幼稚園に入るまでは子ども同士遊ばせる場所がなく、児童館は小さい子ども向けではないので、寒い時期は室内で遊べる場所を提供してもらえると助かる。

上記回答から、子どもどうしの交流だけではなく母親どうしの交流も進み、孤立しがちな子育て環境に対して一定の歯止めとなっていることが推測される。

こうしたサークル参加が、子育てや生活について与えた影響として、参加者は次のように語る。

サークルは役割分担が決まっていた負担が大きいと思っていたが、気楽に來られるところだった。

みんなが同じ悩みを抱えていることがわかった。

子どもが外に出られるようになってすぐ参加しているので、比較は難しい。

一人で悩むことが減った。「こんな考え方もあるんだ」ということ、子どもの怒り方などがわかった。

もっと親の友達ができやすいと思っていたが、なかなかできにくい。

サークルに参加していれば絶対行かなければいけない等、仰々しいイメージがあったが、締め付けがない楽しさがあった。

既存のサークルは輪ができていて途中から入りにくいと思い、なかなか來られなかった。

サークル参加前後の変化には、まず「情報の共有による悩みの軽減」が指摘できる。また「負担が大きい」というサークルのイメージから、「気楽に來られる」というイメージへの転換も見られる。「情報の共有による悩みの軽減」は、設立者のBさん自身のサークル活動に対する思いと符合する。また、「気楽に來られる」は、「できる人ができることを」という活動形態によるものと考えられる。しかしながら、Bさんが述べた知識や経験、問題点の共有化は参加する母親の変化や積極性については、参加者である母親たちからはあまり伝わってはこないようである。

4.1.4 まとめ

参加者の活動内容や理念に対する理解をまとめると、参加者の多くが「自由度の高さ」を「子育てサークル」Aの特徴として挙げている。参加のきっかけになっているのは、行政主催のイベントで紹介されたというものと、既に参加していた知人から誘われたというものに大別できる。参加の動機としては、「情報の入手」、「親の友達作り」、「子どもの友達作り」の3点が大きな柱となっていることが指摘できる。また活動のメリットとして、子どもどうしの交流だけではなく母親どうしの交流も進み、孤立しがちな子育て環境に対して一定の歯止めとなっていることが推測される。したがって、サークル参加前後の変化には、まず「情報の共有による悩みの軽減」が指摘できる。また「負担が大きい」というサークルのイメージから、「気楽に來られる」というイメージへの転換も見られる。しかしながら、Bさんが述べた知識や経験、問題点の共有化については参加者である母親たちからはあまり伝わってはこないようである。こうしたまとめをみると、おおむね、サークルAの設立者であるBさんの見解にそって参加者が活動内容や理念に対し肯定的に見ていると考えられるが、その共有化がサークル活動の運営を担うところまで影響を与えていないことも推測される。

4.2 サークルの運営について

では、参加者は、実際のサークル活動の運営に対してどのように考えているのであろうか。以下では、サークル活動の運営について参加者の回答をまとめたい。

4.2.1 全体的な意見

サークル運営に積極的に参加するかについて聞いたところ次のような回答を得た。

今年卒業する人が多いが、次の担い手がいらない。

0歳から2歳の子どもを入れないと。今の最年長が卒業すると次の担い手がない。

自分がサークルを立ち上げるパワーはない。発起人の存在、WEB上の掲示板の役割が大きい(オープンな場、相談の場。連絡方法は掲示板のみ、掲示板を見れば各人の近況や、いつどのような活動をするかがわかる)。

以上のように、参加者にはサークルの理念へのコミットや活動のメリットがあるにしても全体としては、サークルの運営にはあまり積極的でないと考えられる。

4.2.2 具体的な運営について

次に、参加者に、「子育てサークル」Aの設立者であるBさんが行っている「場所の確保・掲示板の運営・勧誘を行う・毎回参加する」という具体的な4項目について担うことができるかどうかについて意見を伺った。

毎回参加するのはできればしたい。場所の確保はできる。パソコンとか詳しくないので、掲示板とかはできないかな。イベントの提案をする仕事も。

場所の確保はしていた。掲示板は今も報告、情報提供などしている。勧誘は公園での声かけ、チラシを持ち歩いている。毎回参加するのは約束できない。

今はできるだけ毎回参加している。掲示板への書き込みを多少(話題に付け加えるなど)。

掲示板には時々書き込み。保健所での勧誘。できるだけ毎回参加している。

場所の確保はできると思う。毎回参加は難しい。どうしても月に1、2回になる。勧誘は、やってみたらサークルの事情にもっと詳しくならないと難しい。保険の話なんかだと聞かれたことに答えられない。掲示板は、パソコンが苦手なので難しい。

掲示板以外はやっている。パソコンが主人の仕事場にしかない。子供の3ヶ月検診を狙ってチラシ配り。場所は半年交代で場所取り役の人を回している。

なかなか毎回参加できないし。パソコンがないので掲示板とかも難しい。今度、下の子が幼稚園に行くので、そうすれば「場所の確保」や「勧誘」ならしてもいいかも。ただ余りしたくない。家が遠くて自転車でないとおえないから。

以上のように、全体としてはあまり積極的ではないが、具体的な項目については、かなり積極的な意見が見られた。場所の確保については、すでに参加者が交代で行っており、掲示板には書き込みをしている。ただし、掲示板の運営については参加者は行っていないようである。勧誘もできる範囲で多くの参加者が行っている。また、毎回参加するように努めている参加者もいる。したがって、サークル運営に対して積極的には担えないと言いつつ、多くの参加者はサークル活動の維持のために何らかの役割を果たしていることが推測される。

4.2.3 まとめ

サークル運営に積極的に参加するかについて聞いたところ、参加者にはサークルの理念へのコミットや活動のメリットがあるにしても、全体としてはサークルの運営にはあまり積極的でないと考えられる。しかし、「子育てサークル」Aの設立者であるBさんが行っている「場所の確保・掲示板の運営・勧誘を行う・毎回参加する」という具体的な4項目について担

うことができるかどうかについては、全体としてはあまり積極的ではないが、具体的な項目についてはかなり積極的な行動が見られた。

5. 結びにかえて

この小論の目的は、近年重要と考えられているボランティア活動やNPO・NGO活動などの自主的な市民活動によって引き起こされる社会の変容について、自主的な市民活動のひとつである「子育てサークル」を事例として取り上げ検討することにある。そのため、京都市内のある「子育てサークル」Aを対象に自由記述とインタビュー調査を行い、設立者と参加者それぞれに、サークル活動内容や理念とサークル活動の運営についての見解をまとめた。

設立者であるBさんのインタビュー結果から、「子育てサークル」Aは「子育ての話がしたい」母親たちの集まりの場であり、こうした母親たちの負担にならないように「できる人ができる時にできることをできるようにしよう」という運営形態が特徴になっている。こうした緩やかな組織形態でありつつ、子育ての知識や経験、さらには問題が共有化され、参加する母親の変化や積極性につながっていると考えられる(以上、3.1.)

また、サークルの活動を維持していくための運営について、場所の確保・毎回の参加・掲示板の運営・勧誘などについてみると、「子育てサークル」Aを維持するために、Bさんが果たしている役割は非常に大きい(以上、3.2.)

次に、「子育てサークル」Aの参加者11名のインタビューから、活動形態(理念)と運営(場所の確保・毎回の参加・掲示板・勧誘)についての意見を聞いた。参加者の活動内容や理念に対する理解としては、参加者の多くが「自由度の高さ」を特徴として挙げている。また活動のメリットとして、子どもどうしの交流だけではなく母親どうしの交流も進み、「情報の共有による悩みの軽減」が指摘できる。したがって、設立者であるBさんの見解にそって参加者が活動内容や理念に対し肯定的に見ているといえるのではないだろうか(以上、4.1.)

次に、サークル運営に積極的に参加するかについて聞いたところ、参加者にはサークルの理念へのコミットや活動のメリットがあるにしても、全体としてはサークルの運営にはあまり積極的でないと考えられる。しかし、「子育てサークル」Aの設立者であるBさんが行っている「場所の確保・掲示板の運営・勧誘を行う・毎回参加する」という具体的な4項目について担うことができるかどうかについては、かなり積極的な意見が見られた(以上、4.2.)

以上、「子育てサークル」Aに対する調査による結果をまとめたが、分析は記述的なレベルにとどまっている。今後は、サークル活動に対するさまざまな調査を行い、本論で見られた、知識や経験、さらには問題が共有化され参加する人々の変化や積極性につながるために何が必要とされているのか、それが「当事者」による「公共性」や新たな社会変容につながっているのかについてさらに検討を加えたいと思う。

〔注〕

- (1) この小論は、平成16年度京都市男女共同参画講座ウィングスセミナーのフィールドワーク結果を二次的にまとめたものである。このウィングスセミナーでは、京都市女性協会発行『平成16年度京都市男女共同参画講座 ウィングスセミナー テーマ別参加型コース「こんな地域で子どもを産

み育てたい」研究レポート集』が発刊されている。また、この小論に関係する研究として、松田智子(2005)、井上未来(2005)、長光太志(2005)がある。

【参考文献】

- 井上未来, 2005, 「親と子の育ちあいサークル Smile」参加者へのインタビュー調査に見る育児支援の現状と課題, 京都市女性協会『平成 16 年度京都市男女共同参画講座 ウィングスセミナー テーマ別参加型コース「こんな地域で子どもを産み育てたい」研究レポート集』, 47-52 頁.
- 入江幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社, 4-21 頁.
- 長光太志, 2005, 「じゅらく児童館幼児クラブ参加者へのインタビュー調査に見る育児支援の現状と課題」, 京都市女性協会『平成 16 年度京都市男女共同参画講座 ウィングスセミナー テーマ別参加型コース「こんな地域で子どもを産み育てたい」研究レポート集』, 53-59 頁.
- 中西庄司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』 岩波新書.
- 松田智子, 2005, 「母親たちの育児支援 - 「親と子の育ちあいサークル Smile」の事例 - 」京都市女性協会『平成 16 年度京都市男女共同参画講座 ウィングスセミナー テーマ別参加型コース「こんな地域で子どもを産み育てたい」研究レポート集』, 45-46 頁.

【付記】

この小論は、平成 16 年度京都市男女共同参画講座ウィングスセミナーのフィールドワーク結果を二次的にまとめたものである。執筆に際しては、忙しい中調査に協力いただいた「子育てサークル」A の設立者と参加者の方々、また調査を共にしていただいたウィングスセミナー受講生の方々、また共同で指導を行った佛教大学社会学部浜岡政好先生、松田智子先生には、講座を通じいくつかの示唆をいただいた。この場をお借りしてお礼申し上げたい。なお、この小論は平成 16・17 年度佛教大学個人研究費による研究成果の一部である。

(おおつか たかお 現代社会学科)

(ながみつ たいし 社会学研究科社会学・社会福祉学専攻博士後期課程)

(いのうえ みく 社会学研究科社会学専攻修士課程)

2005 年 4 月 27 日受理